

山国の水ざうめける秋日かな
富士かけて大雪つもる月夜かな
消えがての雪よ枯萩日南なる
冬日落ちて大地の果ての岬かな
短日や入日と消えて嶺の雲
鶴啼いて夕づく山の師走かな

出 郷

兄弟に月夜の馬車となりにけり

近詠五句（水巴選）

冬山の深さ果て無く曇りけり
天かけてもつる、嶺々の冬日かな
大風の後なる月の死相かな
残燈に温泉けむれる雪解かな

修善寺範頼之墓

山茶花や濁りに生きて山の鯉

句 帖

大樹影地に浮く月や春の雷
雨かとも春夜音なし天城の火

近詠五句

夜桑摘みし髪解くや灯に遠く居て
朴ちつて冷ゆるばかりや月の幹
天城焼く火に風見えて大いなる

足袋かゝる膝に忘れし密柑かな
冬夜行く身にけはしさを銀座の灯

吟社六月例会 席題「若葉、梅雨」

梅雨の樹々ぼさと暮れたる虚空かな
若葉雨古沼音を立てにけり
梅雨の沼おどろに暮れてふりしきる
小さき町かくして梅雨の木立かな

句 帖

如何に愛でん野菊すがれて水明り
曼珠沙華束のま秋の赤かりし
色鳥の二つゐて鳴く一つかな

句 帖

（曲水7-8）

淋しさに生きてみつむる春日かな
冴返る畑の月夜や芽ぐむもの
兄弟三人自炊（二句）
月夜よし弟木の芽摘んで来よ
行く雁に夜深き飯の炊けたりし

吟社師走例会 於花山亭

二人居に長き夜落ちて枯野かな

（曲水7-6）

（曲水7-5）

（曲水7-4）